

ひ め ま つ



にそよよぬおれり好松小松
哀々ねぬいふ代萬代と
わたりてけむいそみ願む
教への危ろくけふあてたれ
あはせ目出度とみ
よなびや

II

須賀高等女學校校友會文藝誌

おだやかに冬の日暮れて行く。
 四才で母に別れた昌子は、父の側で大人しく遊んで居た。夕方になつて家々から夕餉の煙が上る頃、「お父ちゃん、お母ちゃんは何時歸つて来るの。」ひよいと思ひ出した様に尋ねた。

「ほら、あの星の数だけ寝ると」
 父は空を指差して云つた。昌子は眞面目に空を見廻して居たが、「お父ちゃん星がだん／＼殖えるよ……。」
 父は黙つて吐息をついた。

二年 大森 イ ト

歌集		芋飯……………二
みづくさ……………四		
はなの雨……………五		
句集		
雪解け……………八		
踏青……………一〇		
葉ざくら……………一七		
創作		
ひなまつりに寄せて……………九		
桔梗物語……………一〇		
浪華悲笛……………一一		
詩・童謡・小品……………一六		
論説・校友會報・その他……………二〇		

芋飯集

味噌汁に芋飯なれどほのかなりこの糧喰はむ生きる樂しさ
 一秋の淡き命の蟋蟀よ冬も近づくもつと泣け泣け
 ふるさとの人訪ひ來ればふるさとの地を見る如く懐しくあり
 うすむらに朝の色どり身にうけて雪の男休今輝やかんとす
 めぐり來し春を忘れず咲く梅の匂へど國の安からざるを
 男休の峰に輝く初雪よ平和の年のしるしなりけり
 味噌汁の匂ひほのめく夕暮の我が家に歸り靴の も解く
 今日もまた空しく過ぐる冬の日に獨り匂ひぬ寒菊の花
 久々に友の便りの嬉しさに濡れし手のまき封を るなり
 美しき花によき實はなきものぞ花を思はば實の人となれ
 青蛙青き体に青き巢にびつくり眼玉の青き顔かな
 はらはらと落つる木の葉の音さへも母參らせしかと心ぞ迷ふ
 夕暮にまだ間のありし野良仕事歸るに惜しき俄雨かな
 冬枯の野邊はひたすら何待つや緑あふれて花の香りを
 嫁ぎたる姉の仕事を受けつぎて妹のセータ編み上げにけり
 はき捨てし草履の上に初雪のわずかに白くつもりたるかな
 テーブルの菓子を眺めてかしくまる友と二人の先生の家
 今朝見れば庭の木の葉のみな落ちて梢にとまる鳥のさびしさ

二年	永岡芳江
五年	小林悦子
三年	石川二三子
二年	菊地千枝子
五年	高橋ひろ子
二年	鈴木サキ
二年	大橋キイ
四年	關口久子
五年	鈴木美代子
二年	増淵つや子
一年	小西テイ
五年	小川郁子
二年	高橋文江
二年	前澤喜美子
三年	山井禮子
二年	小平美子
三年	高田良子
二年	杉田文子

一星霜

五年 金枝 ヨウ子

母逝きてより一星霜、水泡と消え去りて
 願りて見れば
 失望と愁傷
 可責と悔恨の一年なりき。
 雨垂の音には、寂寥に噴まれ
 戸を叩く野分には、母の思慕に慄み
 廻り行く生活の後には
 罪無い可責に追はれる吾が幻影の浮び来る。
 運命の軌と共に 永劫の神囁きぬ
 「汝の母去年の暮死せり
 死とは世の敗北者の執るべき 唯一の手段なり
 されば汝の母敗北者にして
 汝、敗北者の子なり」と
 荊棘の道乗り越えんとする
 吾が脳裡には……
 敗北者とは世に負けし者なり
 其の子何を成し得ん？
 吾の失敗、吾の不幸
 敗北者の母を持ちし故なり。
 然れば母を怨恨し 母を怨恨せよ
 然れど母を怨恨し 怨恨する事なかれ。
 母を怨んで越えられる 荊棘の道か？

初便り

四年 伊藤タイ

母を怨んで改められる 不幸か？
 いや人生の續く限り
 天地の壊滅せざる限り
 永久に果てぬわが運命なり。
 × × ×
 世を泡沫と思ひつゝも
 運命と闘つゝ
 斯くして一年は、野の露と散れり。
 いつもと同じやうに郵便屋さんが來て
 いつもと同じやうに「コトシ」と可愛い音をさせて
 門のポストへ投げて行つたこの便り。
 月並な活字で何気なく打つてある
 たつた一片の年賀狀。
 それでも、私には
 なみだが出るほど嬉しいの
 遠いあの方からの初便り。
 さあジョン お輩には何の御馳走して上げやうね、
 だめ、そんなに尾を振つてくれても
 今日のはだつこして上げられないの。
 だつてホラこんなに
 このお便りで私の胸は一つぱら
 外に何も抱えられやしないでシヨ。



映 畫 展 望

五年 三宮八重子

何たる廢墟！何たる悲惨！戦災都市の事ではない、日本映畫界の現状である。唯そこにはインフレーションの大波瀾が飛沫を上げてきているのみである。今日最も怖い事は、作品の荒れて目の粗くなつた事だ。私達の様な餘り映畫に對して深く知るよしのない者迄に痛感させられる事だ。それ／＼がもつと藝術性を持ち、良心的熱意をもつて製作された作品を我々は望んでいる。映畫は我々に對し直接に如何に生きるかの指導の小断面であり、又我々の教科書をそこにいくらかでも求めているのである。我々は映畫に對して美を求め、そして眞實を求めているのだ。

— 女優雜記 —

日本映畫女優の中でどう云う人が一番人氣を持つているのか。私は田中絹代であると思う。演技を確實に身につけ、可憐な女學生から立派な母親役までをスムーズにやつてのける。上原謙が何かの紙上で云つて居た。「一番仕事のやり良いのは田中君だ。撮影している時等は、田中君の芝居は少しもうまいと思へない。併し出来上つたものを見ると實にうまい」と……。この様に彼女は映畫に對する演技を身につけている。若い人の中では高峰秀子の成長を心から念願している。何故か、こ

の人は伸びる人だと思ふ。可愛らしく清潔な感じのする人だ。この可愛らしいと言ふ言葉から、最近の彼女は進んで抜け出さうとしているらしい。「幸福への招待」「愛よ星と共に」でわ立派に大人の映畫をして成功している。「幸福への招待」の臨終の場面の呼吸等は大したものだと思つた。それに高峰三枝子、轟夕起子、この二人も期待している。高峰三枝子と云う人は、何となく人間的には親しめない人だ。併し演技という点でわな／＼しつかりしていると思ふ。最近はその藝に相當の深みがついて来た。轟夕起子はな／＼藝熱心なところが見える。併しその出演映畫が太したものではないのは残念だ。もつとしつかりした映畫の出来る人だと思ふ。だが今までの彼女の役は溫和しい奥さんか未亡人に限られていたのは残念である

「心の旅路」を私はこう思う

大村 妙子

ガースンの演じたボーヤそのものよりも多分に少年的な美しさを持つたケティ、ハイスクール時代に於いてこの人と思つた男性に積極的に出て、そして自己の修養をおこなつた。又やつと結婚まで進み結婚式の讚美歌を選んでいるうちに自分を愛していない事を感じ、その打撃、その悲しみの中にも決して取り亂さず、自分が今後どう生きて行かうとするか、その態度に、現代女性の姿を見出し考へさせられる。私達も人格の完成を目ざして生きていく人間です。どんな悲しみの中にも決して誤つた自暴自棄的な気分にならず知

性と意志を持ちたいものと思ふ。

「いつの日か花咲かん」を観て

二年 山 村 民

戦後に於ける私達の言動を顧みるに、私達の中でどれだけ引揚者、傷病者に對して感謝の念を抱いたものがあつたでせうか？ この事を考へて見ます時、甚だ大きな疑問が抱かれると思ひます。引揚者は外地に於て母國のために活動し、兵士等もこれ又日本の爲に傷つた。その人達は皆當時の封建的な政治の犠牲者なのです。何で彼等に敗戦の罪を負せませう。これも社會が否、國家の情勢がさうさせたのだと思ひます。然るに世の人達は彼等に罪あるが如くに、白い目で眺めている。この様な考への人達が日本人の大部分である事を考へます時に、全く世の矛盾を痛感せざるを得ません。この映畫は私達アマチュアにも、演技に於て少しもこちなさを感じさせませんが、良く現在に於ける世の眞實の姿を描いていると思ひます。學生達が修業の途上にあつて、傍ら社會の奉仕を凡ゆる迫害と戦ひつゝ、新たな方向に向つて進んでいる私達として、大いに感謝し考へさせられる点があると思ひます。肉親の歸國を、日夜世の苦難と戦いつゝ待つて居る。一刻も早く彼等の上の春の訪れがあつて、苦しみの中にも笑顔を持つて過す事が出来る様になる事を切望してやみません。この映畫を観る事によつて世の人達が彼等の存在を認めエゴイテツクな目が少しでも開け、又これ等學生の同胞愛に満ちた行爲を理解する様に

なると云う事を考へたならこの映畫の出た意義があると思ひます。

「コルシカの兄弟」に就て

三年 猪瀬和子

此の映畫は筋として見る映畫で演技としては特別見るべき所はない。シヤムの双生児を興味深く展開して行く所が山である。血と自我の問題を取扱つた所がテーマで戀愛を此の發露としている。とに角人を引つける魅力はある。時代は中世紀的な社會不安を背景とし、表現は例の太つた城主の悪徳を以てしているが、そこには中世紀的な暗さはなく西部劇的な空気が見られるのは成功か或は失敗か。双生児は醫學上では未だ分離に成功した例はないさうだがそれを取上げて特に血縁の深い兄弟が成長し、自我に目覺め、そこに深刻な自我と血との争闘の結果、血と自我の調和を畫く。

そこに兄の戀愛は自我の例として取上げられる悪は亡び善は勝つ。とにかく面白い映畫である。

灰野 潤

映畫の魅力はそれが動いている事にある。動いているものを、よりよく効果づけるものは動いていないバックである。文學に耽るのも良い、音楽を聴くのも良い、美術を愛するもの結構だ。然しこれが近代的化粧道具であつてはならない。

不 安

二年 菊 地 君 恵

雨戸をあけて縁側の柱に寄りかゝつたまま、身動きもしないで、月を凝視している私の顔は、焦々している様な據り所のない顔であつた。うつつらとした雲の他に何一つない大空には、冴えきつた月と時々ちらちらと瞬く星だけがあつた。それらをちつと見つめていると砂漠の旅というような幻想を感じる。空・月・星という言葉がなんの連絡もなく頭に浮んで来る。放心した様な私の耳に「今日まで何をして来ただらう」という囁やく様な聲が聞えた。と、見開いたまゝの目から涙がスーと頬に傳つた。長いと思つた一月近くの休暇もあと一週間で終つてしまふんだと思つと、矢も盾も堪らなくなつて、いやでも過ぎ去つた二十日間を顧みずにはいられなかつた。一學期間というものを何かしら物足りないまゝに勉強も何もしなかつた私は、冬休みになつてもノット整理一つしなかつた。しなければいけないと良心にせめられながらどうしてもノットを開く氣になれなかつた。冬休みの宿題に夢中になつて嘔りついでいる弟や妹の姿がまぶしい様な、時には邪魔になるような氣持だつた。

「何のために生きているのだらう」

「美つて何だらう」

「本當の友情とは」

「良い女の子ってどんな子だらう」

等ということが絶えず頭にあつた。そして何もかもわからなかつた。自分自身が何を求めているのかもわからなかつた。何かしらしてみたくて毎日々々堪えられないような寂しさと、焦燥を感じつゝ、一日一日を送つてしまつていた。此の月の美しさ。そして自分の周囲の總ての此の美しさ。此の世を超えた美しさに縛られてしまふような氣がした。これらの美しさの前で何が出来るだらう。わめきたい。大聲で泣きたい。暴れたい。私はそんな衝動に驅られて思いきり強く雨戸を閉めた。寂しさと焦燥を解決することができないまゝに……………。

卒業の詞

五年 齋藤文子
風の日も雨の日も楽しく過して来た数々の思い出が、灰色の渦になつて、ぐるぐる廻轉し續けるのである。

鈴木タカノ
過ぎ去りし日の数々の思い出に感慨無量、校庭の花にたむれし我が姿。學校生活よ學び舎よ、さらば……。

吉田静子
私は偉大な人物にならうとは思わない平凡人！そして眞實の目標としている。愛する我が母校に早五年、それはまるで夢の様で過ぎ去つてしまつた。

大鹽君子
二度と再び來ぬ女學生時代、あゝ。
向えし春の別れ鳥、迷える鳥も巢立ち行く。

川俣律子
私達は眞理の世界に、冷い社會に、學窓から旅立たねばなりません。未知なる世界への希望に、胸をふくらませて今、學び舎を巣立とうとしている。

若林良子
毎日取り去られるカレンダーの一ひら。もう間もなく卒業なのだ。卒業と言ふ言葉は、何故か嬉しく亦一面淡い恐怖感がある。

小林悦子
櫻花散り行くあの丘に、理想の五年も過ぎ行きて、今日荒波に巣立ちゆく。在學の皆様益々母校發展のために努力されんことを！

直井ハツエ
こゝえ初めて入つた時は、何んとも云いようのない暗い兵舎だつたですね。あの美しかつた校舎も今は夢。

福壽久江
再び會へる日は何時の事でしょう。
窓邊に仰ぐ男体の峰、雄々しき姿、若き血潮はおどる。

小川セツ
遙か一つ輝いている燈明の如き光りを目指して我が人生を進むのだ。澄卒業！この言葉は明朗な乙女の心に何かしら一種の淋しさ悲しさを打ちつける。

鈴木ヨシエ
和やかな青味をたぐへ何處までも續く遠い室を、學び舎の窓より見詰めれば可愛い妹達の遊び聲。

増淵スミ
優しき窓邊、こし方を願れば新たに湧く涙、あゝ氣高き師の恩と、優し友の情をば……。

高野恭子
二人して庭の片隅に腰をおろして、色々と言つた事が、何故か何時になつても……。

築瀬キイ子
幸多き學舎を出でてより、山のあなたに眞を求め、今日も旅行く。

増淵スミ
暗い夜の夜空を、胸にえがく春の鳥。

高木安喜子
先生の教へを守り立派な社會人と成らう。

山本テール
颯爽とした女學生を夢見つゝ入學してより、もう五ヶ年の星霜がたつた。

岡本和子
共に學びし五ヶ年の月日は流れ今巢立ちゆく、あゝ校庭の柳ゆれて今日が別れか、わが級友よ。

原初江
學校生活に於て團結力の偉大さを知つた。そして無意識の内に凡ゆる角度より眞の生き方を暗示された。

三富八重子
鋼のように鋭く牙えた青空、この冬が去ると同時に、私達もこの懐しい校舎ともお別れしなければならぬのだ。

大根田アキ
國家は、社會は、時代の進歩に流されつゝ何を考へようとしてゐるのであらうか。

深澤フサ子
見知らぬ空想に夢見ている中……。
先生方のお話になつた事が、今卒業する間近になつて始めて身に沁みる。

野口江子
暗い部屋に花一輪の明るさ、母校よさよなら。
強く正しく、幸福をうんとつかんで。

駒場八重
追憶に満ちた女學生時代にも悲しき中に、はや別れを告げなければならぬ。美しかつた旅行の日など、数々の思い出。

鈴木美代子
北方の連山には残雪も既に消え、何時しか麗はしい春が學び舎の校庭を訪れんとする頃……。

杉山シゲ子
数々の懐しい思い出をのせて早春の雲は流れる。

土屋マサ
あゝ我が須賀高女よ、我が懐しき教室、別室よ、五十八名の我が友よ、窓から見なれた一本の柳、お名残りおしや。

筒井アヤ子
やさしく強く懐しくおみな道の道を進み行かん、また逢ふ幸を祈りつゝ。

高橋博子
何時の日だつたかしら漢文の時間に出来なくて立ちんばりになつたのは、今となつてしみんと懐しくなつて來る。

湯澤昌子
卒業が間近になりし冬の暮れ、日の短かきが悲しかりける。

竹井トシ
五ヶ年の月日は早くも過ぎ去りぬ。最後に母校の隆盛と幸とを祈る。

小川かよ
春秋の体育大會、校内大會、美しかつた遠足、運動會、そして終學旅行……あゝ思い出はわはてない。

手塚ナミ
暗の中に唯一つ可憐な小さい星、美しくまた、いて居り來るのを感ぜました。つと見詰めている内に頭の中で卒業の日の間近に迫り來るのを感ぜました。

増山スミ
卒業！卒業！此の言葉は嬉しくもあり又悲しくもある。未來を望めばそこには種々な願望も湧き、種々な想像も描かれる。

塚田綾子
卒業の歌を唄い限りなき淋しさを秘めた胸を抱いて校門を巣立つ氣持、何んと例えよう。

森田幸子
有難きは師の君の恩なり。懐しきは友の情なり。

大山静子
「歲月人を待たず」本當に月日の流れの早いに驚嘆致します。

堀場ツヤ
あら！もう三年、四年、五年、そして明日はもう卒業だ。

小川ミチ
螢の光窓の雪、文讀む月日重ねつゝ……しんと静まりかへつた或る日の放課後どこからか聞えて來る歌聲、新たな想いが、走馬燈の様で浮んでくる。

手塚サキ
私は不思議に思いますわ……卒業するなんて。

高野トヨ子
鉢の福壽草が高貴な匂いを放つ、窓外にはもうあたり一面夕まがけがぶつてゐる。新春、そう言へばもう梅の香の便りも耳にする頃となつた。

大島幸子
小學校時代の友達、女學校時代の友達、山で或は海で、温泉で會つた友達……皆いゝ人達だつた。

手塚タカ
お掃除後の教室は明るく、清い乙女心を含んだ中原淳一の繪が貼つてある。教卓には黒板を背景に菊の花が一輪淋しさをにやにやにゆれていた。

高橋セイ子
すつかり葉の落ち盡した一本の梧桐、寒風にさらされながら雪曇りの空に立つていた。

小川郁子
五年の長き年月もはや終りをつけようとしている。何時迄も子供の私、何か心配です。皆さん元氣でね。

送別の言葉

昭和二十三年の平和な春を迎へていよゝ皆さんも卒業する事になりました。これも一重に校長先生始め、諸先生方の温い御指導の賜物と深く感謝しなければなりません。入學せられてからその間の思い出は数限りの無い事です。その中でも母校の戦災は特に大きな悲しみでした。雨の湯元、伊香保の修學旅行は楽しい過去となりました。今や世の中は多事多難の時、社會の一員となられる皆さんは日頃の先生方の御教訓を深く心に刻みつけて、強い自覺を持つてお暮しなされ、母校の發展を見守つて下さい。

雪 解 け

雪解けや驛前に並ぶリンゴ店	二年 石崎アヤ子	電線に風のかゝりて落日かな	五年 筒井アヤ子
日向ぼこ病後の爪を切りにけり	二年 高橋能子	電線にあの子の風がかゝつてる	一年 小松千枝
冬の山大木を倒すこまかな	三年 平井セツ	白梅の一枝置きぬ長廊下	四年 猪野園子
煤拂たなより落し天保銭	一年 飯野シヅエ	冬の日や雪のひとよきミン踏む	五年 齋藤文子
咳こめば去年も今年もなかりけり	三年 石川二三子	歌ひつゝ小學生の夜番かな	二年 津村シヅ
小雀の籠に移るや今朝の春	二年 加藤フサ	老梅や今年もゆかしき花を見せ	二年 小島孝子
初雀障子に影を落しけり	二年 江部好江	冬籠り訪ふ人もなく暮れにけり	四年 伊藤たい
ほのぼのと障子明るく春立ちぬ	二年 小島孝子	黄昏れや呼道にある焚火跡	五年 湯澤昌子
小春日や枯木の枝々日をうけし	三年 大根田幹子	元日の猫に手毬を投げてやり	二年 雪節子
梅の香や路地深く行く友の家	二年 丸山榮子	書院窓の明り吸ひ込む福壽草	二年 石川和子
ピンポンに汗ふく窓の小雪かな	二年 坂本住子	すゝ拂幼き頃の壁の疵	五年 豊田イク
霜の朝病む母を残し登校す	二年 釜井幸子	福壽草机の上のこぼれ砂	二年 鶴飼静江
餅つくや子等嬉々として集ひ来る	二年 柏崎千代子	木枯やみて鎮守の森に落日かな	三年 大森テル子
停電にこたつの上のランプかな	二年 平田安子	西風やかまどの始末ねもごろに	二年 福富孝子
初めての席題むづかし初句會	三年 市島トシ子	傷癒えて父雨天を手折りけり	二年 大森光枝
春の村うす紫に黄昏れり	二年 住吉正枝	室籠りいつしか雪になりにけり	四年 福田知子
月高く風なき夜半の冬木立	二年 館野美子	霜晴れや取残されし柿一つ	五年 増淵榮
春愁の友と歩きぬ歸校道	二年 熊倉照子	手毬唄ふし面白く子等うたふ	二年 大田山タキ
花散るや一年生の肩の上	二年 増山スミ	小春日や頭刈る子の圓き顔	二年 長島キヨ
うば櫻春の名残りを散りゆけり	五年 小森孝子	大寒に雪も降らずに過ぎにけり	二年 福田カツ子
春晝や霞の中に五重塔	一年 小森孝子	夕もやに包まれて行く大晦日	二年 田アサ

創作

ひなまつりに寄せて

三年 野崎田鶴子
 思へ人、はなれ小島の山陰に
 癩女が一人する雛祭を



梅橋の渡り緑の生垣に新芽が萌えて真白な花
 が点々と咲きこぼれて繪にも描きたい程の美
 さ、ライラックの爽かな匂ひが何處からか漂つ
 て参ります。早春の陽ざしは惜しみ無くそれ等
 の上に降りそそぎ、何處やらで啼く牛の聲も何
 と云へぬ長閑さである。

こゝ瀬戸内海の片邊り、離れ小島の軒屋に
 も漸やく春が訪れて参りました。

桃色のベニールをかぶり美しい装いをした春
 の女神は、お雛祭という昔懐かしい行事を贈物と
 して……

三月三日、今日こそは日本の乙女の待ち惚れ
 た雛祭の日であります。

私達、雛一同も一年に一度の此の時れの日を
 どんなにか指折り數へて待つた事であらう。暫ら
 く前から、嬉しきでみんな眠れなかつた程でし
 た。けれど私達よりも、いや日本のどの少女達
 よりも、今日の此の日を待ち惚けていた人があ
 りました。それは「千恵」と呼ぶ私の御主人な
 のです。「十餘年隠れて病友が流したる涙の跡の
 塵のしみの色」運命に弄ばれ泣きつゝ遺したる
 この眼は開けてやるすべなき過去の歌、千恵様
 のお傷はしい御様子に餘りにもよく物語つてい

まと思ひます。

薄幸という言葉は千恵様の爲に用意された言
 葉の様に思へてなりません。

捨て小舟の様な今の千恵様にも幼い頃は笑し
 い数々の思い出が御座居ました。

白壁の土蔵に閉まれた大きな家は幼ない千
 恵様にとつては餘りにも淋しく、時には恐しく
 て泣きたい様な日もありました。だが両親の大
 らかな愛を我が身に一つに受けて人の世の陰とい
 ふものを全く知らずに、伸げ／＼と育つた千恵
 様の爲に老いた両親はどんな願ひでもいとう事は
 ありませんでした。紫藤の百花園と云つて土地
 の人々から呼ばれた庭園は四季折々の花を絶や
 す事無く、一人娘の千恵様を思ふ両親の思やり
 は深かつたのです。

色とり／＼に咲き亂れる花園の間から千恵様
 のお姿を垣根越に見た里人達は花の精かと驚き
 の目を見張るのでした。数多くの千恵様の御持
 物の中でも持にお立派なものは桃の節句のお雛
 様でした。一間幅の緋毛氈に、十二段に隙間な
 く並べられたお雛様、ほのかなぼんぼりの明り
 に金の屏風がキラ／＼と映えて、友誼の着物を
 召した千恵様がお雛様かと具違うばかりの艶
 やかさで本當に繪の様な顔だつたと申します。

その日の雅びやかさと云つたら、なんでも里
 人達の語の一つになつておられますが、わざ／＼
 東京から取り寄せたお振袖に、田舎には見られ
 ぬぼつくりを履き、深紅のリボンを付けて村の
 鎮守様へ詣でるそのお姿こそ本當に京人形の様
 にお美しうございました。

けれど好事慮多しの譽への通り、幸多かりし

千恵様の御一家にも、彼女が七つのお祝が過ぎ
 て半年も立つた立内内、両親は唯一人の千恵
 様を残して、はやり病いの爲に亡くなられて終
 いました。お優しいお母様にも、穏やかなお父
 様にも逝かれて、廣い世界に身よりも無い一人
 ぼつちの千恵様のお歎きはそれは／＼お痛まし
 く、納棺の時等がぞろぞろと行つてお終ひに
 なつてはいや、いやと死線に取籠つて泣き叫
 ぶその姿は、村人達の涙を流らすにはいられま
 せんでした。

その年の疫病は村でも数多のお葬式をしまし
 たがその中で千恵様程可哀想なお方はありませ
 んでした。しかし不幸はそれのみで留まりはし
 ませんでした。

泣く／＼父母のお葬式をすませた彼女は、村
 人の情で心優しい乳母を召使との淋しい三人暮
 しもどうやら馴れて間も無い頃、思ひも掛けぬ
 恐しい病氣は千恵様のお体をむしばみ初めてい
 たのでした。四國邊りでは別段珍らしくもない
 と云う病氣ですが、千恵様の美しいお体にもそ
 の様な血が流れて居たのでせうか……

いえきつとそれは衛生思想の發達してない
 村の不注意からの感染であるのでせう。

最初にそれを氣附かれて醫師にも診て頂き、
 はつきりとした病氣の宣告を受けたのは千恵様
 の十五歳の時でした。其の時の彼女の驚き、何
 んと言葉につくせの程であつたでせう。彼女
 は夜も寝ます、じつと考へ込んでいました。こ
 うした日々も十日も續いたら、彼女は考へるすべ
 なきを悟り總てをあきらめ、生れた時から手短
 かにかけて面倒を見て呉れた乳母と唯二人僅かな

身の圍り品を持って、生れ故郷から程遠か
らぬ瀬戸の離れ小島の軒屋に移り住んで
終はれたのです。彼の日より十有餘年千恵
様の暗い寂しい生活が始まりました。心優
しい温しい彼女は今の我が身を顧みるに
ついても亡き父母の優しかった面影を慕ふ
のであります。

安齋懸しや ほろやれほう
子玉懸しや ほろやれほう

と云う歌がありますが、父懸し母懸しと
毎夜泣き暮らす彼女の眼は、露れにもだん
／＼と視力が弱くなって行くのでした。
身体が年毎に衰へて行くにつれて、目も
無い千鳥になつてしまわれたお影の薄い千
恵様のほつそりとしたお姿は憐れと云ふよ
り、寧ろあの世にお出での両親が一目御
覽遊ばしたなればどう思はれる事でしょう
闇夜に立つた様な彼女は悪魔が非常に鋭か
つた。かさこそと散る枯葉に晩秋の黄昏を
悟り、ひら／＼と舞い落ちる桃の花に春の
訪れを感じました。

そして又、今を盛りと咲き匂う桃の花は
世の常の女の姿の様に……。二片、三片風
も無くくる／＼と舞ひ落ちる櫻は自分の
身上であるという事も悟つておりました。
けれどもどんなにか淋しい御身の上的千
恵様であつても、春が来るのを如何に待ち
侘びた事でしょう。春を待つ心は雛祭を待
つ心でもあつたのです。

此の世に何の希望を持たぬ彼女には、年
に一度の雛祭は、夢の間に間に過ぎ去つた
遠い過去と現在とを結ぶ唯一の虹でした。

内裏びなと五人にやしと私達官女まりしか
いない、淋しいひつそりとした雛段ではご
まいましたが、當日になると綾や白酒等を
供へて下さつたりぼんぼりに明りをともし
て下さつたりしました。

此の日ばかりは昔段口を利く事をも忘れ
ていた千恵様も、嬉しさに雛祭の仕事にい
そ／＼となさるるのでした。そして午後から
わ、ほのかに匂う桃の香に染み込み、瀬戸
にもたれてちつと考へて、遠くの空を眺
めているのが常でありました。

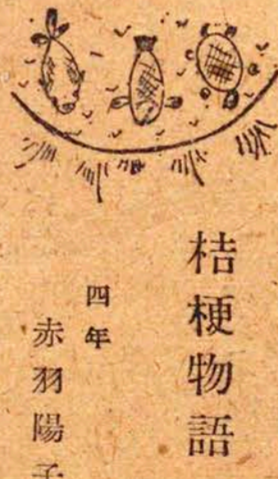
固く閉ぢられた眼には何にも見えなくても
千恵様の胸の中には父母在りし幼き頃の
記憶の一頁が繰り開けられていた事をご
いませう。

山の彼方の空遠く飛び去つた千恵様の背
春の灯は、かくてかすかすか点つて行
ました。望みなく、何んの甲斐も無い彼女
は心に固く天國を信じていられた其處にはお
父さんやお母さんが手を差し延べて愛し子
の来るのを待つていなさると深く信じて居
られました。

千恵様のお考への様に私達もが天國と云
う所がある様な気がしてなりません。そし
て私もどうかして其の天國とやらを一緒に
連れて行つていただけたらと秘やかな氣
持で一杯でございます。

後 書
思入、離れ小島の山陰に
痴女が一人する雛祭り

これは小川正子さんの書かれた「小島の
春」の中の一節です。その本は昨日のクリ



桔梗物語

四年 赤羽陽子

まえがき

何時だつたか題名も忘れてしまつたが少
女俱樂部で時代物の小説を讀んだ事があり
ました。そして其の全体を一貫して流れる
麗しい美しき何んとも言へない感激を
感じ、何時か此の美しさを自分で書きあげ
たいと思つて居りました。

それから二年位はたつてしまつたでせう
と云つて冬休みを迎へた私の腦裏にあの時
の「美」が私の手を無意識の中に走らせた
のです。これが「桔梗物語」なのです。
私の流し込んだ「美」を少しでも汲取つ
て下されば幸と思ひます。

村上平三郎は今日も島津家老居城の城壁
を何かに操つられる人形の如くに歩いて
た。

「あゝ、何も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺は人間の前に武士なのか——」

「叔父上——この平三郎に……」

「悲痛な嗚咽は雪夜の暗を縫つて遠く／＼消
えて行くのであつた。

（II）

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

平三郎の鍋島藩では城主若狭守を中心に醜
い争が暗々裡々に續いていた。
其は前の奥方藤元の方の志形身、八重姫
を立て、鍋島藩の世継と様とする一派と
茨の方（彼女は御部屋様であつたが藤元の
方の死後新しく奥方となつた）の生れて間
もない若君を立て様とする一派との争いで
あつた。

平三郎の叔父は藩の事以外考へない典
型的な家老であつた。彼は當然若君が立た
れる事を白髪頭に望んでいた。
其の爲には自分の命をも返り見ない老武
士でもあつた。

又一方では島津家老を筆頭に「姫君であ
らうと若君であらうと先に御生れになつた
八重姫こそ鍋島藩を繼ぐべき當然の方であ
らう」と云うのが彼等の主張する所である。
村上家老派では何れも知らない八重姫にお
氣の毒であるが藩の爲にはと言ふ暗殺論が
興つた。早くも其れを知つた島津家老は
時を移さず八重姫を自分の居城へとお迎へ
申し警護の武士も物々しく刺客の侵入に應
えるのであつた。

(III)

「答々方お出合なされ——曲者で御座るぞ
——」 慌だしい聲を後に聞きながら、平三
郎はがばりと伏せた。彼の伏せた所は城の
内外を結ぶ「さつき橋」の堀中であつた。
鮮血が石足から生温く流れている。
さつき橋を渡る足音が頂上に聞える。
「何、其程遠くへ行く筈無いらぬぞ。武田氏
が槍を曲者の足に強か負した筈だ」

「だが一体何所へ失せたのぢやらう」
「歩く事が出来ないのでからの——あ御家
老」
「どや／＼と橋上へ人が集つた様だ、多分
島津家老であらう」
「どうじや曲者は見つからぬか」
「御家老人数をもつと繰出せませうか」
「あゝ武田氏か感謝致すぞ姫は無事ぢや」
「おゝ雪が降りそうぢや——武田氏の槍で
は賊も生きては居るまい。集めても良い頃
ぢやらう」
そんな言葉が微かに聞きながら、平三郎は
しん／＼と冷行く堀中に意識を失つて行つ
た。ふと氣が附いた。
平三郎は無意識に立ち上らうとした。幾
千もの針が一度に足を突刺す様な痛みだ。
有たけの力を振絞つて立ち上らうとした。然
し体は彼の言ふ事を聞かない。もう一度立
ち上らうとしたが失張駄目だ。急にこちら
へ近づく足音に平三郎は急いで身を伏せた
「又雪が降つて来たの——今夜は城内だ
けだそうぢや、城外を廻らないだけでも隨分
遠うからな——」
「我々も堪らんよ毎日毎晩見張り役とは
——」
「だが一体今日の姫のお使ひは何なのだ」
「拙者はお供格だから直接解らんよ。何ん
だか書籍の様な物らしい」
「作者は聞いた事もない人だ、殊によるよ
我國の書籍ではないかも知れんぞ」
「姫も外出はされないし……そんな本でも
讀みたくなるのだらうな」
「おつとこんな所で立話は止せう。姫がお

「おつとこんな所で立話は止せう。姫がお

いつの間に降り出したのか綿の様な白雪
が音もなく渡りの青間に吸はれていく。
「——平三郎此の叔父が頭を下げて頼む
のぢや——藩の爲の爲に」
「叔父上此の平三郎は臣下の前に人間で御
座います。幸福の烟は未だ半分も切り開い
ては御座いませぬ……」
「平三郎おことわり致しまする」
「な、なに——平三郎そちは不忠臣の名を
蒙りたいのか……そちを信じたのがこの叔
父の誤りであつたのか——」
「異國の書物に狂つているそちはこの叔父
の顔にも泥を塗りおつたわ……」
「平三郎母上の事も考へてくれ。そちを今
日迄成らした老先短母上を忠臣の母と
して安んじさせようとは思わぬのか……」
「平三郎頼むぞ……。姫を弑し申した時
にはそち一人を死なせねばぬ。この白髪頭
も冥途の道連れに——」平三郎承知して
呉れ

「叔父上——この平三郎に……」
悲痛な嗚咽は雪夜の暗を縫つて遠く／＼消
えて行くのであつた。

（II）

「あゝ、何も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

「あゝ、俺も彼も運命なのだ。眞實を通せ
ば母上の嘆き、叔父の御切腹、そして俺は
不忠臣者——」

ぬか……
「まー私賞家へ行くので御座居ますわ……お疑ひ下さいますな。其より桔梗こそ早く事が御座居ます。なぜ平三郎様は素性を明して下さらぬ」
「あー桔梗殿は何も知り申さぬのぢやー我君の事も」
「えっ！我君。平三郎様其の譯をお話し下さいませ。何か仔細な事……此の桔梗を信じて下さりませ」
桔梗の聲は熱走つてゐた。

そう云はれて平三郎は誰にも言えない心の人となつて居る彼女に黙すすもなかつた。彼の話し一語々々は桔梗の心を完全に奪つてしまつた。
「平三郎も武士が嫌でなぬ。自由に申して自然に誰にもがめられず命せられず伸々と生きたいので御座居る。しかし使命を果さなくば詮無い事で御座居るのう」
彼の眞實は今初めて桔梗の前になげ出されたのである。

「桔梗殿何をかよふに泣きなさる。町家のそなたには關係御座居るまいに」
「な何も知らずに島津居城に居らつしやう八重姫様がお可哀そうでなりませぬ。本當に何も知らずに……」
越して何か氣高く映るのであつた。
「桔梗殿そなたは御顔も美しいが心もいや總て美しい方だ」
「いえ……私泣虫なんですわ……まあ竹そなたも其様な所で泣いて平三郎様に笑われませぬ」
台所で正體もなく泣き濡れてゐる乳母竹を優しく叱るのであつた。

（五）
次の日平三郎は立つて見た。
足の痛みは全然無かつた。矢驥に歩き廻つた。
「あゝ辱けない。明日は此の家を發せしめ

心の中で平三郎は何邊も桔梗に感謝したその日賞家へ行つて来た桔梗は其夜「平三郎様桔梗貴女様に幸福の鍵を持つて参りました」
「拙者に……平三郎とんと解り申さぬ」
「實は私、姫様のお友達として選ばれて時又お伺ひして明日の夕方私達だけで桔梗ヶ原を散歩致しませぬ様に約束して来ましたの……首尾良く御木懐を逃げなまつて下さりませ……そして幸福に」
桔梗は彼の目を避けて何かをこらへて居る様である。
「おゝこんなにも早く望みが達せられるのか、平三郎はすっかり有頂天になつて居るのう」
「辱けない桔梗殿そなたの御恩は生涯忘れ申さぬ。こゝに平三郎あらためて御願ひが御座居る。本懐の腕には幸福の品を二人で耕そうではありませぬか」
「平三郎様桔梗は貴女様の仰る事は何でも聞く積りでしたけれどそればかりは……」
「いや桔梗殿否と云はせませぬ。そなたが幸福でなければ平三郎も同じ事、幸福でと、低く流れるすゝり泣きの聲、戸外にたずんでゐる人影、其の黒い影は乳母竹でなくて誰であるらう」
（六）
翌日から平三郎は一つの光を見出した。心の光である。
其の光源には美しい桔梗が微笑でいた。桔梗ヶ原へ竹と簪いたのは月が上つたばかりであつた。
「竹殿少し早過ぎた様で御座居るの」
「本當に」
「桔梗殿が姫を案内してこゝへ来るこの事感謝の致しやうが御座居る」
「平三郎様、此の桔梗ヶ原は秋になると一齊に紫の色をたゞへて各々の姿をした桔梗が数知れず咲揃うので御座居ますよ。今は

亡き藤元の方も毎春秋になりなすつと八重姫様をお連れして参つたもので御座いますよ」
竹の聲は細くそして震えていた。
「さあ、もう参る頃で御座居らう、見られては不都合……」
平三郎は切れた影をひそめた。と、瞬間さつと右へ避けた。はずみを食つてばつた倒れたのは竹であつた。
急で起つた竹は無茶苦茶に彼に附きかゝつて来た。
彼女の手に月の光でキラリと光るものが握られていた。巧に避けた平三郎は彼女の利腕をつかんで短刀をもぎ取つた。
「彼の聲は激しかった」
「貴方は何もしらない、貴方を助けて、そして貴方の爲に……」
「姫様が……それでは何様がお可哀そうです」
竹の口から迸る聲は餘りにも悲痛であつた。
「な、何……桔梗殿は……拙者を助けて来たのは……ひ姫君だつたのか……あゝ、拙者の幸福の爲に……」
平三郎はどろりとしたものだ。
彼の苦しさも竹以上のものであつた。此時早くも鶴島家の定数をちりばめた一挺の駕籠が靜かに止まつた。下り立つた女人こそは正しく桔梗であつた。
「待ちなされ、平三郎殿を良く見なさるがよい」
今は自分の命を助けて呉れた桔梗ではない、八重姫を仰ぎ見るのであつた。
月は打掛を披いた八重姫の全身を青白い

光で包んでいた。彼女のあれ程長く房々していた黒髪は無残にも中途から切られてあつた。そして手には数珠を握つて居る。
平三郎の口からは低い驚嘆の聲がもれた「ひ、姫君！」
彼は嗚咽が引受るのみであつた。
「平三郎殿は今日限り佛の弟子になりなすつた。そなたも来て下さる事を信じます。弟子となるからには上も下も御座いませぬ同じ人間です。妾から頼みます。平三郎殿あの品を二人で耕しませぬ。そして誰にもがめられず命せられず自由に其して自然に伸び……と明るく楽しく生かませう」
平三郎は止めどなくあふれる涙を拭ひもせず靜かに立ち上つた。
其處には涙をたゞへた八重姫、いや桔梗が微笑で居るのであつた。



浪華悲笛

四年 安達 倭子

秘めやかにおとすれ来し夏の夜。
いつまでも暮れおとすれ来し夏の夜。
風がふき染めるよつとるべ落しに暮れて行くうす紅く染つた灼熱の陽の消えぬ夕空に不氣味な程赤い月が昇つてゐる。
数日前からの戦に……に疲れ切つた兵士達は血なまぐさい土の上にしばし假寐の夢を結んでゐた。
戦争の恐怖と空腹とに悩まされつゝ戦ふ者の慘めさがそこにあつた。
月をかすめて百舌が鋭い聲をばなつて飛

んで行く。
「いか草むらにすだく虫の音も遠く夕もやの中に溶け込んでしまつた。荒涼たる戰場に秋の香がうかゞはれる。さん／＼と降りそゞろ月光を体一ぱいうけて彼女が身をこぼす。思へば何と悲しく淋しい運命だつたらう十四の時祖父康の許に嫁しつた自分だつた。その間、虎口の中に晝夜を過し、たゞ秀頼だけを頼りに生きて居た。しかしその秀頼も母澁君の爲に思ふ様な政治生活すら出来なかつたのである。か弱い主君の身を案じて、狩をすゝめる者もあつた。
木村重成や片桐且元等は戦ひのそなへに武藝、馬術、遠乗等をすゝめたりしたが、その度に澁君は御座居る遊立でながら、「妾は右大臣の生みの母ぢや、妾のゆるしも得ず右大臣を御狩におつれ申すなどとは……なりませぬ。又その様な心配は無用ぢや、右大臣は妾の子でありませぬ」
とせまるのである。
主君の爲を思つての企てもこうした澁君の爲になし遂げられないのが常であつた。こうした事が有つてからはきまつた大奥には盛大な酒宴が行はれ澁君は大杯を重ねた。氣の弱い秀頼にとっては強氣の母にさからふ事が出来なかつた。
それから三年の月日が水の如く流れ去り彼女にとって苦しい悲しい日が續いた。
秀頼の身に大難がふりかゝつて来た事を……しかも愛する祖父康との戦にわが夫が初陣するとは……
關東と豊臣方の間に板ばさみにされ、今人質も同様な日々であつたが、今その中であつてすく／＼と育まれて行つたのは愛の芽ばえであつたのだ。唯ひたすらに彼の愛を求めて生きてゐる

彼女には、懸しい秀頼の面影を追つて毎夜泣き明かす夜が多かつたのである。しかし浮世は今革命の大混亂の最中であり、晝は矢叫びに恐れ、夜は落葉におびやがされた。
過ぎし日、彼と二人櫓の上で楽しく語らつた事が今では寶物に等しい過去の思ひ出だつた。
始めて語らつたいつかの夜、君のふく笛の一曲に胸おどらせつゝ聞いた乙女の日。淋しきも辛きも知らず育つた幼き頃、やさしき祖父の老顔……
それらが走馬燈の如く彼女の頭の中をかきめぐり、目の中の熱いものがぼろ／＼と落ちて行く。
彼女は思はず機の上にうづ伏した。彼女の嗚咽が夜の靜寂を破つて流れた。長く／＼尾を引きながら……
「姫……」
彼女は其の聲にはつと顔を上げる。
「ま、上様……」
まだ蒼白き顔には二筋の尾が月に光つてゐた。彼女は急いで涙をふきつゝ立ち上つた。しずかに座に座つた秀頼はやさしく千姫の肩に手をやりながら
「姫よ、其女は今泣いておつたの？ どうしたのじや……」
「姫に泣かれると余は身を切られる様に辛いので……郷里が懸しうなつたのか……」
「まあ……上様、その様な事を、おららみに存じます」
かすかにたれた背の髪がはら／＼と前へこぼれた。その髪の下からむせぶ様なすすり泣きもれて、塵についた手の上にぼろりと露の玉がころがり落ちた。
これから告げねばならぬ悲しい事に秀頼は胸を痛めたり、やゝあつて決心した様に「姫……今宵は悲しい知らせを告げたい。つたのじや……」心をおちつけてよう聞き

「……今まで其女には知らせとらなかつたが、もうこの大坂城には兵糧がないのじや……兵士達は飢と戦つながら懸命に城を守つてくれているが、しかし戦はいつか激しさを加へて行く、長門も戦死した、後藤も討死した。次に来るのは我々の最後ぢや、が余は其女までも死出の旅路に道連れしようと思つた。……」
泣いても泣ききれぬ氣持だつた。どうして今さらおめ／＼と祖父の許へ歸つて行けよう。妾は貴方様の妻で御座りますよ！
彼女は茫然として流れ落ちる涙をぬぐひもせず秀頼に噴出した。
「上様！妾をも死出の旅路にお伴させて下さりませ、上様を先き立たせて此の世に何の樂しきかありませぬ。お願ひで御座りますよ！」
秀頼はかすかに首をふつた。
「聞きわけのない事を申すでない、余も姫をばなしとしない、別れとらはない、しかしお身をおつれる事はかなわぬ、其女は未だ十七じや、若いのじや、今からでも他家に縁附ける身の上じや、その様な事を云はずに余を死なしてくれ！」
「いやです！いやで御座ります、どうぞ妾の……妾の一生のお願ひをお聞き下さりませ……」
しかと秀頼の小袖にすがりつき身も世もなくなつた泣くのみである。
秀頼はこのあはれな、いじらしき妻を我が腕の中に抱擁してやりたかつたが、しかし今はそれも詮ないことだつた。

彼はしつかりと彼女の手を握つた。
その白くなややかな手、櫻貝の様な爪！
「姫！この世の別れに其女の顔を見せて静かに見上げた彼女の顔はあまりにも美しかった。
白芙蓉の花の嵐にうたれたるに似て……白き通る様に白い頬、黒曜石の瞳、そのまつ毛の奥の澄みきつた泉の中から湧きいでた露がまるく盈んでほろりと頬をすべつた。
二すぢのほつれ毛が淋しい、筋の通つた鼻、紅き唇、これから後の生活の恐怖におの／＼その紅き唇……
それらは、背と少しも變つてゐない。それがかへつて彼には未練があつた。
何時までもつきやらぬ別れに心を鬼にして立ち上つた彼の目にも薄い露が浮かんでゐたのである。
「姫！其女との夫婦の契も今宵までじや……」
二人の目が、ひととからみ合つた。その視線をはらひのける様にして、彼は足早に廊下に出た。
あとには、彼女が「わつ」と泣き伏す聲しか耳に入らなかつた。
松が枝にかゝつてゐた月が密雲にかくれた。
どこか遠くで犬の遠吠が……
かくて大阪夏の陣の戦の火蓋は切つて落されたのである。
秀吉が難攻不落を誇つたあの豪華な大坂城も、徳川方の爲に火煙に包まれ城の兵士達も皆討死した。
わが日本歴史の一ページを飾るべく、大阪夏の陣はかくてこゝに終りつたのである。



みづくさ

はうことも歩みもならぬみどり子のみ靈負ひませ南無地藏尊
 うら枯れし野末の草におく霜の消ゆるがごとく子は逝きにけり
 鶯はなどか訪はさる簾かけに友ほしげなる梅の一本
 草枯るゝ那須野が原の末遠く雪眞白なり岩代の山
 雨あらし迷ひの雲をぬけ出でし眺めてしがな長はの月影
 久方の空より春は來にけらしよに先立ちて雲雀鳴くなり
 春雨に霞む雲井のあげ雲雀姿は見えず聲ばかりして
 かさこそと音するあなたふと見れば雉子あそべり那須のしの原
 わが汽車はいま鬼怒川を渡るなり雪の高原空に仰ぎて
 大空の果かと思ればほの白く雪まだ消えぬ春の山々
 海原は靜かに明けて春淺くほのかに浮ぶ島の山影
 すや／＼と眠る我が子の顔見ればうさも忘れて心安らか
 取出し古き手紙を読みゆけば悲しきことも喜びの日も
 ふりしきる雪にかゝれど簾かけの梅はちらほら綻びそめし
 學びやにいと乙子女子友として今日もたのしくすごしけるかな
 松の内夢と流れてこともなくけふもしづけく夕去りにけり
 まくらべに書物かさねてねる夜半や明くれば松も過ぎにけるかな
 いま更に戦死者のうらみぞ思はるゝ我ひたすらに生きんとぞ思ふ

相馬清五郎

川 俣 義

渡邊ユキエ

岩崎益子

田内 侑

大浦フク

松沼光子

はなの雨

花の雨ぬるゝ思ひを今はたゞ吾子の試験を待てる親達
 日暮方信號燈のすぐ上に富士の姿が薄く見えけり
 たゞ一つ散り残りたるコスモスの花に冷たく秋雨ぞ降る
 正月の近づきたりと指折りつ楽しく歌ふ幼けき姉妹
 さまよひし身は旅宿に暮るゝとも心はとほき母の守歌
 男休のいたゞき白くなりつるを我が學舎の窓に望まむ
 赤々と燃ゆる焚火に見も知らぬ自轉車の人も降りて來りぬ
 吾が妹の人形遊び見るにつけ幼き頃の我を思はん
 夕空にまたゝく星を仰ぎ見て獨り淋しくふるさとを思ふ
 待ちし春今來らんと咲く花や名残り惜しくも散り初めにけり
 羽子をつく老ひたる母の横顔にありし少女の顔を偲ばむ
 別るれば日々とうとしと言ふ言の葉の眞ならんやむつみし友よ
 したゝめつ友への文に夜は更けし火の番速く去りにけるかも
 夕立の去りにし後の水溜り空の青さに白雲置きぬ
 初春のよろこび胸にみち／＼て足並かるく登校の道
 春淺きこの川土手の猫柳手折らんとして幼な日を思ふ
 再建のはかどらざりき春なれど草木は芽吹き鳥歌ふなり
 古手箱に一杯つめし千代紙の一つ一つにこもる思ひ出
 あじさいの葉かけに露の宿りけり夕べの雨の霽れしひとゞき
 螢呼ぶ子等とり／＼の聲そへて夕涼しき川の邊りに



五年 竹井トシ
 三年 關 秀子
 一年 大塚 時子
 四年 高橋 久代
 五年 手塚 ナミ
 五年 杉山 シゲ子
 二年 片桐 良子
 二年 小林 ヨシイ
 二年 大根 田トキ
 一年 高橋 キク
 二年 坂本 住ク
 五年 湯澤 昌子
 三年 桑川 徳子
 四年 猪野 園子
 二年 柴田 順子
 五年 高橋 ひろ子
 二年 廣瀬 芳子
 二年 粟 節子
 二年 菊地 正恵子
 五年 高橋 セイ子

す み れ

五年 原 初 江

しつとりと朝露にしめつて
 恥ぢ入るやうに
 人目をさけて咲いてゐる
 可憐な一本のすみれ
 單純で素朴な田舎の色
 それは田舎娘の眞心を
 象徴したやうな色
 そして田舎の太陽の色だ
 わたしは野邊に咲く花の
 眞の美しさにふれた氣がする。

人 生

二年 中 田 宮 子

暗黒のレールを
 突進する列車

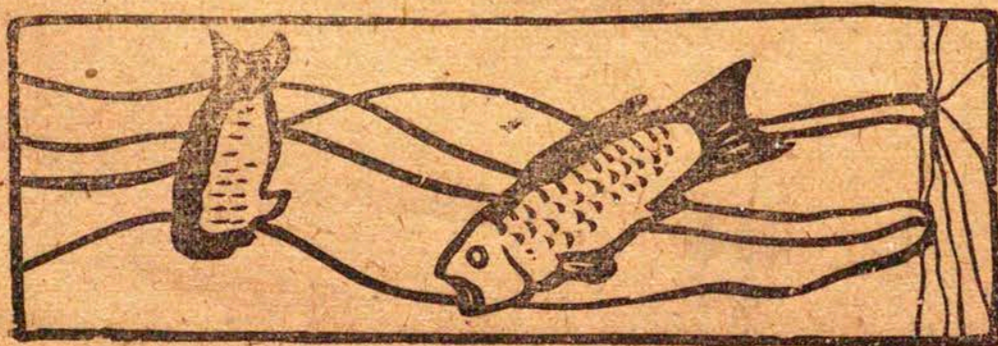
恐怖々々と叫びながら
 小さな光をもとめて
 どこまでも列車は走る。

ホ ス ト

五年 小 川 カ ヨ

ねえそうぢやなくつて
 人間は随分我儘よ
 さうよ寒い日は暖いものを飲んで
 家の中に籠つたつきりよ
 それに反してわたし達は
 木枯に吹きまぐられる様な時も
 焼けつく様な暑い日でも
 決して愚痴をとぼさないわ

これでわたし達は本望なのよ
 立派に人間の爲に役立つてゐるんですけどもの
 地球上から消えてしまふ迄は
 人間とわたし達は共に存在するのよ………



踏切

二年 小 平 美 子

がたん。にぶい音を立て、踏切の棒がおりた。自動車も、自轉車も、人も、私もこの白と黒の...

初雪

四年 原 田 節 子

十二月も半ばを過ぎたある日の午後、貧しい裏長屋の片隅で八重は静かに死んで逝つた。

はなかつたが、窪んで尙大きく見える眼が、今は亡き母親を偲ばせて潤んでいた。

童話

鳩の母子

二年 小 平 美 子

ある森の中に鳩の母子が住んでいました。お母さん鳩が鳴きながら飛んで行く後から、...

わるい鳥達や、鼠や、飛道具などしかないんです。よしなさいね。思ひなをしてお母さんのそばにいて下さいね。

「これ位のこと何だ。もつと飛べなければならぬ」と子鳩は心に叫び夢中になって飛びつきました。

踏 青

屠蘇なくも氣新なり注連飾
み燈明の光りうすれて初日かな
初孫を抱きておろがむ初日かな
雪の日や寂然として置炬燵
雪の日や満員のバスに置きざられ
栗いがの枝に残りて星高し
店既に裝飾かへて初日の出
書初や居も氣も共に改まる
初光り大地に畫く松の影
峰つゞき雪白くして春に入る

卒業生を送りて

紙芝居子らと別れて村時雨
春の風二階になりし新學期
卒業や別れを惜しむこゝかしこ
夜に入りて安産と聞く涼しさよ
秋の雨行樂の群歸り來る

相馬清五郎

川 俣 義

川 上 吉 治

雪

二部一年 館野美子

綿のちぎれが
落ちて來た
高いお空の
神々は
あまりに
冬が寒いので
姫達集めて
夜着作り
餘つた綿を
掃き下す
ふんわり積る
綿の雪

雨

二部一年 内山梅子

トタンに降つた雨だれ坊や
スーツと流れて
ポトリと落ちた。
マンガで讀んだ雨だれ坊や
北の雨 南の雨も
仲良し小良し。
雨だれ坊やおどつてる
足上げ手上げおどつてる
お手々つないでおどつてる。

劇中のお宮ショールに顔うづむ
元旦や富峰にかゝる茜雲
とりどりの聲とりどりの色カルタ會
春の富士デツキの混みや汽車の旅
嫁ぐ日や梅に名残りを惜しみつゝ
凍てる星夜行列車の破れ窓
春寒やある日リンゴの齒觸りに
子の土筆手折らんとするを止めけり
獅子舞の太鼓寄らずに過ぎにけり
踏むは惜し踏ますば行けじ雪の道
目にしみし雪の野原の通ひ路
雪の朝竹にとらるゝ小徑かな
凧の舞ふ大いなる空仰ぎけり
春近し子の晴衣縫ひて夜もすがら
小春日や軽くボールを投げて見む
秋晴れに運動會の豫行かな
大寒や壯老へ行く病ひかな
短日や張物板の日の移り
冬ぬくし圖畫の時間の寫生かな

大 出 光 威

渡 邊 甲

齋 藤 磯

北 山 シン ガ ノ

須 賀 淳

新 井 キ タ

宇 佐 美 節
勝 沼 美 枝

情 表

二年 菅谷タマエ

私は一度自分の眠つた時の顔、怒つた時の顔、笑つた時の顔を見たいと思つて居る。級の人達は私の顔を見て時々笑ひこぼるが、そんな時は今一體どんな顔をして居るんだらうと思ふ。

朝、髪をとかす時、自分の顔に一種の面白味を感じながら鏡に向つて色々の表情をして見る。眠つた顔と云うものはちつとも苦がなくて安らかだ。——と、誰かの言つた事を思い出して、片方の目をつむり眠つた様子をして

もう一方のあいた目で鏡に映つた自分の顔を見た。駄目、駄目、まるで俄か盲か目に埃がはいつた時のやうで、片方のあいた目につられて今にも開きさうである。今度は兩方の目をつむり、うすくあけて見た。これも駄目、お婆さんか、でなければ鼻の上に眼鏡をかけて新聞を読む老人みたいだ。どれも皆いやな眠り方だと思ひながら、笑い顔をやつてみた。笑い顔となると人の失敗か何かを見て笑つて居るやうで、一寸きまりが悪いが思い切つてやつてみる。驚いた、大きな口だ。其の大口をあけて笑つた所はあくびをしながら笑つたやうだ。けれど目は一寸も笑つて居ない。つくり笑いだ。いやな笑い方、さう思つて眉の根にしはを寄せたら、目がさんかくになり、口がとがつてひよつとこ面のやうになつた。思はずぶつと吹出したら鏡が一度にさつと曇つて、其の中で私の顔がぼんとなつて居る。笑ひ終つてふと考へた。人間の一人々の表情は、神様がお授けになつたものではないだらうか、だから無理にやつてみようと思つても、出来ないのは當り前だ。

自然の表情を作つてみようなんて、無理な願ひだつたと思ひつき、もう一度鏡の中の自分を見た。そこに眞面目くさつた自分の顔を見だし、これこそ私の自然の表情だと思つて、鏡の前から立ち上つた。

眠れない夜

二年 鈴木道子

寢床に入つて目をつぶつたが仲々眠れない。そこで横に向いて見たがやっぱりだめだ。餘り動くから眠れないのかと思つて、じつと目をつぶつて寢ようとする、今まで気がつかなくつた時計の音がカチ／＼といやに大きな音になり、耳ざわりでよけいに眠れない。

そこで何も考えまいと思つて目をつぶるが、どうもカチ／＼の音が氣になる。仕方がないので起き上つて目覚し時計を後向にしてしまつた。

今度こそはと思つて目をつぶり眠ろうとするとなほ眠れない。

そこで下腹のあたりをかくして静かに息をついて見たが、どうしてもい／＼な事が浮んで来る。

遠くの方から汽車の音がゴ／＼と聞えて来る。

私はどうしても眠れないので、しかたなく床の中でばつちり目を開いて天井ばかり見ていた。

The Tea-House on The Mountain-Pass
from "Kusamakura" by Soseki Natsume

Translated by H. S.

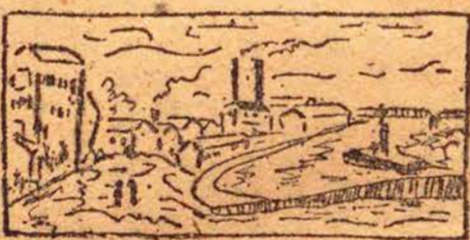
Engaging "ahoy", there is no answer.

Looking into the interior through the eaves, the sooty paper-screens (Shoji) are closed behind.

The other side is out of sight.

Lonesomely five or six of straw sandals (Waraji) are hanged from the eaves, and they are swaying tiresomely.

Under them, something like three boxes of cleup sweets (Dagashi) are in a row, beside these 5 Rin coins (Gorinsen) and Bunkyu coino (Bunkiyusen) are scattered about.



落

日

二年 中島 祥江

夕暮——私は丘に立つていた。

沈まんとする日光は、うすい光を丘の木立に寂しく投げかけている。

野を越え、山を越えて吹いて来る風は、思ふ儘に成長した木々の梢に忍びやかな

音をたて、枯葉の一片々を揺がせて何處へともなく逃れていく。

夕靄は静かに動いて野を包み、やがては丘を廻つて私までも包んでしまふ。

私は眩しい落日をみつめる。

それはくる／＼廻つて森の彼方へと沈んでいく。

「あゝ、落日よ、なつかしい落日よ！ お前はもう沈んでしまふのか、私一人だけ

を残して……。」

私はあの泣き濡れた月が出るまで何時までも此處に残つていよう。悲しみの歌を

うたつて……。

月が出たら月と一緒に泣きもしよう。

「さらば落日よ！」

私は沈み行く日の後を追ひ乍ら、唯一人森の梢に光る星をみつめていた。

論説

女子の運動と教育

士 岐 榮

あらゆる生物界において自然的な欲求として体の運動の必要なことは大抵の人がいくらか目をさまして来たといへる。このことは直接生命保存の大機軸であり、又生きることは即ち運動であるといつてもよいからである。

スポーツはこのような自然的欲求のもとに人為的に規則を作つて楽しみの中に生きやうとするものに外ならない。このことは人間性の發展からみると非常に有意義なことであり、教育の手段として引用されてきたのである。

われ／＼人間はこのやうに男子であれ女子であれかやうなことを日常生活の中に無意識的に多くは経験してゐるのである。併し意識的なスポーツは男の間に發達し、女の間に前述の認識を否定するやうな場面にはしばしば會うのである。これは人間の理想より推せば重大問題である。即ちこのやうな自然的欲求のあらわれはすべて人間の歴史を創造してきたのであるから。

だから以上のことゝ事實とは餘りにも離れすぎてゐるから私は女子の運動について述べようとしたのである。私は毎日不思議な位男子と女子の運動について比較する機会をもつてゐる。男子の學校においては大きな庭の殆んど全部が何もない野原のよう

な場所になつてゐて、スポーツをするに十分な場所を與へ、男の子がかげ出して遊ぶときの呼聲と笑聲のコーラスが目がさめる様な思ひがする。そしてそれがつゞいて間は脈搏をおどらせ、あらゆる器管の健康な活動を保證する。わかき女の子たちの「健物」が見せてゐるものと何んて似てゐないことだらう。私はつい最近まで一度だつてかのやうな立場より本當に女の子の生き／＼したことに心がひかれたことはなかつた。

此の驚く可き相違は何故だらう、女の子の体は男の子の体とすつかり變つてゐてこゝろいふ生き／＼した運動が必要ないのだからか、男の子が驅られる大きき活動の活動に對する刺激を女の子は感じないのだからか、それとも男の子にあつてはこれなくして適當の發達はのぞまれぬ、体の活動に對する動機とこれらの刺激がやむを得ないのであるの姉妹には自然がさうやう刺激を何の目的もなく與へたものであらうか。ところが前述のやうにこゝろいふ活動の目的を全然曲解してゐるのであり、強く有能な身体を作ることが望ましくないかと思はれてお

つて優美といひ、一里以上歩くに耐へぬかあれがまづい、これが食べられぬといつて一杯かそこらでも要らないといふ食慾、普通、決斷と敢行の伴はぬ病弱がもつとも淑女とか貴婦人らしいとおもはれてゐるといふ邪推を漠然と私達はもつてゐる。

これが女性の理想だと信じてゐることは大きな誤である。では「女の子も亂暴に走

り廻らせ、男の子のやうに野蠻にして、お轉染にするのですか」とと假面を冠る禮節な運動は罰に罰する罰だといふことを信じてゐるところから尋ねてみても分る。このやうなことは女らしくない習慣が出来ること、併しからゆ曲つた心配は全くその女の子たちの教育に對して意味のないことである。何故かといふに、内外國を通じて男の子に許されてゐる遊戯(スポーツ)の活動が事實紳士になること、妨害するどころか良い結果を得るのに、同じやうな遊戯の活動が女の子の女らしいことになるにどうして妨害するでせうか。いくら運動場をさわぎ、亂暴であつても、學校の門を出た若き人は大勢の中や、家の中であつてもやうなことに恥けることはない。運動着をすれば紳士であり淑女なのである。

若い女の心理からしても次のやうなことが納得できる。成熟に近づくにつれて女らしい習慣の氣持が、少女時代の同じやうな遊戯に有力なコントロールを與へせざるやうか。そして女は男よりも見榮に對する大きな心づかひを持つてゐるのか。だからして女には亂暴な荒々しいことは何でも強い抑制が湧くのではないか。女の子は専ら嚴格でしかも冷静な體といふ心づかひがなければならぬ人は何と恥しいことである。私達は眞に彼女らに對して眞の理解と正して愛の發露のない教育は無用だといつてもよい。誰れも人がかやうな子供より大人へとなる過程があつたのは偶然ではないのである。

新しい歩み

須賀友正

「ひめまつ」創刊號は各方面から相當の反響を呼んだ。長い戦時訓練の連続で文藝方面はほとんど閉却され、しかも本校の性格からいつて、さうした基礎に比較的乏しかつたにもかゝらず、終戦後まもなく混亂の中で、どこにもかくも一冊の文藝誌がまゝまつたといふことはほんたうに大きい收穫だつた。第二號は一段の成長が見られることゝ、ペンを書かせながら、何やら心の躍るものを感じさせられる。

敗戦三年、新しく文化國家として發足した日本は、着々と民主革命の歩を進めてゐるが、教育の面では六・三・三の劃期的改革が斷行され、輝しい將來の發展が豫想される。五十年の歴史ある本校も昨年度より新制中學が誕生し、本年四月にはさらに高等學校としてその使命を果すべく卒業生、在校生、職員一丸となつて全力を傾注してゐる。

しかし世代的實相はあらゆる面に混亂をきたし、過渡的な形態は今後も數年はつゞくと思はなければならぬ。新憲法の實施とともに婦人にも新しい地位が與へられ、婦人の社會的・家庭的地位は著しく重要性を加へてきた。それだけに婦人の責任もまた高められ名實共に「與へられた新しい婦人」の名にふさわしい發展を備へなければならぬのである。婦人の文化度が高まらなければ、眞の意味の民主革命の達成は不可能であるとも言へる。

論説

「シエクスピア」と「ヴェニス商人」

Shakespeare and "Merchant of Venice"

大出 光 威

新教科書高等國語(二)にヴェニスの商人がのつてゐるので、世界最大の劇作家である彼、シエクスピアの外貌の一端と、ヴェニスの商人に就て少しく解説を加えてみようと思ふ。

人性を良く知り、諧謔に富み、情熱の深く、空想の豊富なる、而してその判斷の確實なる等の点に於て、古今東西シエクスピアに匹敵するものはない。勿論彼にも多少の欠点ある事は認むべきだ。然し彼の奏功の大きを以て比すれば其の欠点も無意義なものとなる。

英國人の誇りとして、否全世界人類の誇りとして「印度を失うとも英國はシエクスピアを失いたくない」と迄言はしめたのも眞にむべなるかなである。

彼は一五六四年(我が國に於ては信長が足利氏を亡す一寸前)英國中部のストラットフォード・オン・エヴォンに農産物商をやつてゐるジョン・シエクスピアの長男として呱呱の聲をあげた。シエクスピアが十三才の時迄は、彼の父は幸福だつた。幾多の下级職務に従事した後、参事會員、市長等の要職に就いたが間もなく事業に失敗し、金

錢上の困難が相繼いで起り、その結果中途にして學校を退き、家事手傳いをしてゐた。間もなく二十にも満たない若きであつたが無理強いに八才上のアンと結婚し、「二年後他處で暮しを立てる爲に妻子を残して去つた。その後の事は多分に傳説的に判然しないが、家を出るや附近の村で教師をしたと言ふ事である。

彼の文學的花盛りとも言うべき時は英國都市ロンドンに於ける生活で、彼が二十三才から四十九才に至る迄二五年間のロンドンに、主として彼の定住地であつたのである。ロンドンに於ける彼は、初め劇場に職を求め見物人の馬の音、呼出し係、地方廻りの俳優等々苦心の結果、遂にグリニチ宮殿に於て御前興行をやる迄になり、それが彼の名聲をあげる端緒ともなつたのであつた。

後に劇作家に轉じた彼は喜劇・史劇・悲劇に其の豊かな天分・詩才を發揮して有名な四大悲劇「ハムレット」「リヤ王」「マクベス」「オセロ」その他「ロメオとジュリエット」掲述の「ヴェニスの商人」等三七篇の名作を完成し、大文豪としての地位を確めた。そして一六一六年、五十三才を以て全世界哀悼のうちに世を去つたのである。

「ヴェニスの商人」この劇は嚴肅であるが愉快な風習劇で、その中には少くとも四つのエピソード、即ち一ポンドの肉(教科書はその二部分)匣の選擇、猶太人娘の墮落、指環の紛失がある。

そして戀愛と友情と、並びに人情と金錢の價値とを對照してゐる。ヴェニスの商人アントニオは心友バサ

ニオに金を貸す、それはバサニオが想つてゐる女主人公ポーシャを訪問するに要する金である。然しその時彼は現金を持つてゐなかつたので猶太人のシャイロツクから借金して、一定の日に返す事、然らずには己の肉を一ポンド、罰金として與ふる事をシャイロツクに誓ふ。第二幕でシャイロツクの娘がアントニオの友人の友人ロレンツと家出する、その結果猶太人は益々アントニオを憎む様になる。第三幕はバサニオがポーシャの邸宅に到着し、其處で彼はポーシャが父の遺言中の言葉により、夫を決する方法として三つの匣の内正當なものを選ぶ。彼は結婚の承諾を得た。然しアントニオはその負債を辨償する事が出来ず、猶太人が彼の肉一ポンドを切り取ると言ひはつてゐるのを聞き、叶つた戀の喜びも鈍くなる。第四幕に於てヴェニス公爵の面前でアントニオが審問を受ける。ポーシャは男装して辯護士となりシャイロツクを敗訴にする。バサニオは負債の元金を携えて辯護士と思はれた人に會いに行く。

併しポーシャは其の命を受取らないで代りにバサニオがはめてゐる指環を望む。それは彼等が結婚を約束した時にポーシャがバサニオに遺つた指環である。彼はそれを與へて(第五幕)兩人が彼女の家に歸つて女の假裝を解いた時に、彼女は自らの侍女と、バサニオの友との同様な場合を盾にとつて、バサニオの無節操を詰る。

話が全部解つて四人共めでたし、で結末をつげるのもで高級な詩情と雄辯、滔々たる議論とで注意すべき下りはヴェニスの商人に充ち満ちてゐる。

「ヴェニスの商人」は一五九四年に「ヴェニ

ニス喜劇」と云う題で初めて世に出されたもので彼の喜劇作品の中の傑作である。(齋藤勇氏所論考)

ダンスの必要性

町内 侑

リズムに踊ること、即ちダンスである。私達が學校に於て行うダンスを稱してスタイルダンスと云ふ。

では何故私達がダンスをやるか考へて見よう。大きく云はれば結局「人間完成」である。即ち音楽の刺激に依り物の響に應ずるが如き力と、これ等を表す能力、自律力を自覺的に練り、以て心(精神)身(肉體)の統制力を練磨し、審美教育、情操教育、リズムの訓練をなし創作の鑑賞の能を涵養するものであると云ふ事も出来よう。これ等に依つて私達が獲得するものは何か。

一、感情的生活を高尚優美にして併せて身体に藝術訓練を與ふる。

一、優美な態度と輕快な動作を與ふる。

一、心身の活動をリズム的ならしむる。

一、模倣より自ら表現の工夫に邁み創造力を養ふ。

一、明朗快活な精神を養ひ且興味と慰安とを與ふる。

以上の点を列記することが出来る。ダンスとは「感情を調律的な身体運動に依り表現する藝術で有る」と一言する事も出来ると思ふ。

論説

文化と書道

南軒川 侯 義

我々人間の互に其意志を直接に表現するの言葉があり、之を間接に表現するに文字によらなければならない。...

足ればよいとしたならば衣は寒を凌げば足り、食は飢を充せば足り、住は雨露を防げば足り...

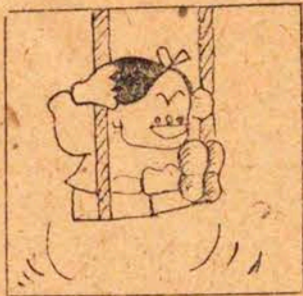
日本国民の精神も是に依て維持する事ができる。漢字が我國に移入してより千六百年...

ゆる水窓の跡」と仰せられ、御公権は「心正しければ則ち筆正し」と述べられている...

葉ざくら

圖書室を出て葉櫻のベンチかな 古池に今ぞあやめの花ざかり 母と子と虹を眺めて父待ちぬ...

叱られて川の夕べや螢取り きのうより今日にふえたる落葉かな 草花の一つ一つに蜂来ては去り...



舊職員宅訪問記

麻生先生

健全な教養

須賀華子

私は、よく言はれてはいる文化の問題が文藝の狭い範囲だけのものではなく、文化を廣く生活文化と解し、私達の生活を豊かにし、美しく、美しくするものと考えてゆきたいと思つています。文藝藝術などの情操面と並行的に、實生活としての藝術の面の修得をも考えねばならないと思つてます。情操と同時に技術面が修得されて始めて婦人としての健全な教養が得られるのではないでせうか。かくしてこそ始めて健全な文化生活が営まれ得るでせう。

情操豊かな、そして被服(和洋裁)家事、手藝、作法などの技能をよく修得した婦人のつくる家庭生活は想像して見ただけでも明るく楽しいではありませんか。戦前の時代の混乱の中にも、私は、私たちが女性の進むべき道をはつきりと見きまはめその中心となる太い線だけは忘れたくないと思つています。

山本先生

冬休のある暖かな日、記事をとる爲に山本先生を須賀の自宅に御訪問した。先生は正月が間近なので奥さんと丁度お餅つき最中であつた。「先生あつて又お伺ひしますわ。忙がしい時で悪いと思ひ、歸らうとすると、「まあい、ちやあないか」と餅搗をやめて縁側に腰を掛ける。煙草をふかし乍ら学校の事等と種々とお聞になり、又先生の勤めて居られる雀の学校の話をなされた。

「毎日汽車で通ひですか」「普通は自轉車で、雨や雪の日は汽車で通つて居るが汽車が混んで半洗いかたいだよ」とお笑ひになる。「ひままつに舊職員訪問記を載せるので何かお話を頼みたいのですが……」「そうだね別にこれとあらまつた話はないがね、学校の隆昌と皆の健康を祈つていますよ」と仰し送られた。

私は杯の音に送られて山本先生の家を出た。(三年 山口記) 山崎先生よりのお便り! 明けまして御目出度う御さめです。先日は御親切なる御手紙有難く拜見致しました。其後御元氣にて御精進の事、心より嬉しく存じて居ります。そして、「ひままつ」が近々発行せられる由、皆様どんなにかその日を楽しみにお待ちになられて居る事と存じあげます。私の其後の近況と申し

ましても、あまりにも平々淡々たる生活です。昨春水らく皆様と共に學んで参りました須賀高女をやめまして四月十日、横濱の方へ結婚致しました。横濱へ参りましてから二、三ヶ月立ちましたら横濱市内の女學校からは非音楽の先生がいなからきてほしい等言はれ、大部考へました。が家庭人になりまして仲々雑事が多いもので残念ながらお断り致しました。十一月に入つて体の具合が悪く、又横濱の食糧事情も大變悪いので宇都宮へ歸つて来て静養して居る次第です。

町へ時たま出ますと、皆様の御元氣な御姿を拜見出来て、なつかしくあの學校生活の事など思ひ出して居ります。どうぞ今後ますます御健康でたのしい學生生活を十分味はつて、よき社會人として果立つていつて下さいませ。まづは右近況お知らせせませ。

中村ドリ様 齋藤わか子 小林先生 「先生のお宅はこゝから歩いて約二十分……三十分位かな、この邊の見當り」大田先生の指される空の彼方には、雪をいたいた男体の連峰が屏風をたてたようにそびえて居た。小林先生訪問記を命ぜられたと偶然同じく小林先生を訪れる目的の大田先生と車中一緒にたつた譯だ。戦時中強制的疎開の跡だとかいふ小山驛前大通りには人通りも稀で、乗換客の雑踏して居る構内

「先生の實際生活についてを伺う。」「まずお勝手を手を便利に改良してしまひお仕事のしやすさを優先してしまひ、でも學校にいらる時、教壇で皆さんに一日の決定を立てる生活する事や、色々なお話をしました。が實際に家庭に入つてさう言ふ事をするとお講義をした様にはなかなかならないのは残念です。」「おつしやる、さうすると理論と實際は仲々一致しないものかと思つた。」「先生、學校にいらた時と今とどちらがよいですか?」「學校にいらた時の方がよかつたわ。」「學校にお勤めしていた時の事を思い出した表情になられる。」「大分遅くなつた後、先生は遅くなりましてから、別れを告げて歸る夜空には射的の明星があかしく輝いて居た。(二年小池記)

岡里先生

冷めたい黒髪山の嵐が私達の耳をつんざく様な、とある日、私は岡里先生のお宅を訪れた。がしかし、お家に居られたのは岡里先生の愛妻とその背に負はれていたのは第三の岡里先生であつた。事の次第を告げて翌日來る事を約し乍らいとまをして玄関を出た。

翌朝登校の際お寄りして頂い紙片には次の様な事が記されてあつた。私はそれを見つゝ微笑を浮かべ乍ら幾時か學校へと足を運んだ。

中耳炎の再發、子供の百日咳、お別れ以來不運です。拜んで買ひ、三十日拜み続けられた百萬圓の夢もオチヤン。毎日城山へ二里の道をアタリ乍ら、何故昔の様な春が日本にやつてこないのだらうと考へ嘆いて居ります。「ひままつ」の御發展を祈りつ。(二年 菊地記)

下さる小林先生の御心づかいが身にしみるようである。……それがなかなかなり思ふようには運ばなかつた。去年の驚愕、相當なものだつたんだが……いざ出演となると、全員によほどの理解がないとむづかしいよ。」「小山の學校も相當なものだよ、でも去年は締切日の關係で演れなかつたが、今年こそはと大いに張り切つて居るらしい」と南先生の文學談はいつまでも続く。

「最近、うちの學校ではピンポンが盛んでね、僕はまだ始まつたばかりだが、もう打ち込みはロングでやつて居るよ。」「道理で、とても血色がいい。須賀女時代とはまるで見違える様だよ。」「四方山の思ひ出話の数々は時のたつのも忘れさせるも氣がついた時は豫定の小山驛發三時をどつくに越つて居た。驛迄御見送り下すつた小林先生は、暮れ残つた空にくつきりと描き出されて居る右手の森らしい所を振り返つて、「ほら、あの森の下を思川が流れて居るんだ」と、遠い思い出をたどるかの様な面ざしでおつしやられた。(三年 市島記)

清島先生よりのお便り

前略 嚴寒之押、然も冬休中遠路のところ私の家まで二回も御訪問下さい、其の度毎に留守致しまして誠に申譯ありません。其の時私は休中を利用して山本先生とともに新山を買つて急に整理の必要上留守にいたしました。私と山本先生とは、一年中

とはまるで別の町かと思はれるほどの静かさである。一、二丁行くと立派な舗装道路に出る、東京街道である。この路を北へ約十五分位行くと先生の住宅がある。農家風に建てられた母家は四方を葉田に囲まれて、如何にも静かな落ちつきを見せて居る。大田先生と共に文藝部生みの親である小林先生は今日わざ／＼大田先生を驛迄迎えにいられたとのこと、御留守居の奥様に迎へられて先生の御居間兼書齋らしいお部屋でお歸りを待つことにする。桑の木で自然の垣を作つて居る庭はひろ／＼として明るい。間もなく本を両手に持ち切れないほど抱へ込んだ先生が、「やあ／＼どうも遅くなつて」と馳け込むように歸つて來られた。下り下りとした分厚な本は美しい表紙の漱石全集であつた。實は譯で見慣らなかつたから次の列車かなと思つて本屋へ廻つて來たんだ、大分待つた?と心配して下さる。此場合どういふ風に御返事するかかな、等と迷つて居る内に大田先生が早速引受けてくれた。

「いや今來たばかりだ、が漱石の全集とはすごいなあ、漱石は僕も少し集めかけたのだつたが下宿の戦災で焼いてしまつた。」「それは惜しい事をしたな、何しろ彼の作品はどれを見ても良いからなあ。」「全くその通りだ、現代一流作家で漱石の影響を受けて居ないものは皆無とも云えるからね。」「とくに縣下の藤能コンクール像どうなつた?……出場した?とせき込んで聞いて

教員室便り

K 記

河原町にあつた頃の教員室は、敷地の東北隅、随分暗くそして冬などは着物一枚進ら程の寒さ、然しそれは正反對に、何時も明るいなどやみな空気がたゞよつていました。

現在は校舎の南端、陽當り百パーセント内外共に明るきなごやかが溢れています。さて校長先生をはじめ全職員は學校復興のため一生懸命お働きです。校長先生のお寒さにも元氣一杯との廊下傳とは大變速い、ベナルを踏まれての御通勤、それも毎朝第三番到着は下らない程の御精勤、先生方もあとから出勤されてはさまりが悪そうです。校長先生の御計劃でもとのような校内放送設備が出来上り、晝休みは明るいメロデーが校内にたゞよつています。

相馬先生のお寒さにお風邪さへ召されず、以前よりずつと御壯健、近頃お優しく御進歩をかたむけられて、皆をグン／＼引つ張つて行つて下さいます。

渡邊甲先生が寄宿舍の廊下傳いに裁縫室へ、最近距離の職場に活躍された先生、只今は花房町から御通勤、徒歩の距離で随一番遠方です。それにも益々元氣寒中をよそに顔一杯の汗で御出勤、「今朝は暖かですね」の先生のお言葉には頗る嬉しませられています。

須賀ハナ先生がすっかり御洋装になられすつきりと、スマートなお体によくお似合いです。洋装の効果は同先生が御体験です。

牧野先生がスゴウの冬眠期に入つてから幾分御健康を害されたり、先生には何時もラケットが手ばなせないらしいです。川俣先生も何時も御元氣で朝早くから御出勤、放課後もおそく迄御手習、書道研究部員も押すな押すな盛況ぶり。

渡邊ユキエ先生が同窓會幹事先生として學校發展のため一段の御努力、寄附が澤山集るよう祈つていられます。すつきりバレーで近代線は添はれました。

新井先生「齡のせい、か腰が痛くて」とは同先生の言、渡邊先生と同様バレーの近代の波にのられました。去年の夏、白根登山をされたことを喜んでいられます。

川上先生「大田先生がひめまつ編輯に御専念、二歳を迎へる「ひめまつ」もすく／＼と成長し諸姉を悦ばせることとせう。

北山先生が御物資配給係を一身に引受けられ毎日お忙しく、老練な手腕で見事に處理されていられます。

岩崎先生が被災後残つたミシンを大事にして御指導です。夏暑かつたミシン教室とは異り現在は二階大教室、櫻咲く頃ともなれば花見も出来るよといふ、羨ましい限りです。

宇佐神節先生が麻生先生から四年生のバトンを受取られて毎日おそくまで教材の御

研究です。

灰野先生がスゴウのズボンには選手達と一緒にドロまみれ、熱ある御指導振りです。のび／＼した季節が来ることをお待ちです。

土岐先生がソフトボールの部長さん、お得意の妙技で熱心に御指導、決勝戦で勝を女前にゆづられた時の残念さが今でも胸のうららについています。時々大きく伸びてはシーズンを待たれています。

大村先生が宿題の豆人形が何千人、すてきね！可愛いね！の讃辭を一身に集められ、やがて来る高等學校設備資金かく得のバザーに備へていられます。

田内先生が春の野を飛ぶ胡蝶のやうに輕快なダンスの御指導、運動會ははなやかにした。

鈴木先生がお元氣なお膝の英語が教室の窓から流れて來ます。まさに學校と云う感一番お若い先生張りきつてお出です。

須賀洋先生がこの夏スゴウで鍛えられこの冬はきつと風邪などひかれないうです。校内の設備やら整備に御腐心されています。齋藤先生が科生に生きる女性のため御進歩をかたむけての御指導、ラヂオの故障など一寸の間になほして下さいます。

大浦先生が岩崎先生と同様洋裁方面について後輩の指導に餘念なくまた慕はれてお出です。

松沼先生が山崎先生の御あとをうけられきれいなお膝、美しいメロデーが昔の兵衛

の佛を一新されています。

勝沼先生が事務室で授業料の受付、來客の受付、電話のとりつき等と御多忙です。大島先生が健康を害されて目下御静養中御全快の日を祈つています。

伊藤先生も何時も御元氣、はやく暖かになつて農園に出られる日をお待ちかと思ひます。

山崎さん相變らずの器用さ、出來ないのは蜘蛛の巣位でせう。お蔭で學校の窓も整備され寒さを凌いで全校七五〇名が張り切つて勉強しています。この頃は幾分頑固がうすらぎました。

ねづみ

二部二年 齋藤 悦子

今日もね、ちゆうちゃん
鴨居を傳つてやつて來たのよ。
何をしようやつて來たの、
さつき上げを神棚の
お供物を引きに來たのね。

編集よろく

◇この頃の新聞を見ると嫌な事許りだ。手近な例でも壽産院事件、帝銀の毒殺事件等、事件々々で大賑いである。いくら敗戦國といふへ文化國家として立つていこうとする日本の、汚辱の一頁になるのだ。暗い世相にあつて、尙そこに一筋の光明を認める心のゆとりが欲しい。「國民のゆとり」この位今後の日本にとつて大切なものはない。ゆとりがあつて始めて其處に、國家の、社會の、吾々一人々々の平和が齎らされるのだ。こう言つた点で文藝の價値は高く評價される。

◇扱お待ちかねの「ひめまつ」第二號が出来上りました。創刊號と同版・同頁です。比較してどちらが良いですか？
内容も体裁も他校の文藝誌に劣らないと思ひますが……。

◇創作、浪華悲笛の安達さんは時代物戯曲を書かせては校内隨一人、桔梗物語の赤羽さんは創刊號の童話で覺えていると思ひますが現在非常な進歩を見せています。

「ひなまつりに寄せて」の野崎さんは純國文派、同じく創刊號に「或日の午後」をのせ、鋭い感觸と天稟とを發揮した新進氣鋭の三年生、今度も小川正子さんの歌をよんで、すぐ此の構想が浮んだのだそうです。その他短歌・俳句・詩壇に於ても上級下級多士濟々、唯一回の募集で之丈の作品が集つたのは本校生徒の文藝性を暗示しているものと言えましよう。

◇校友會文藝誌としての「ひめまつ」は純然たる文藝誌ではなく多分に校友會的な色彩を入れねばならず其處に編集の苦心があり、又面白味があります。新たな試みとして卒業の詞・舊職員宅訪問記を入れました。懐しい先生方の片鱗に觸れられた事でしょう。御忙しい時間を割いて玉稿を給はつた職員方には厚く御禮を申し上げます。何編集の都合上割愛したのもありますから其の点は御諒承下さい。(〇肥)

第二號	昭和二十三年三月十日印刷
ひめまつ	昭和二十三年三月十五日發行
—非賣品—	
發行所	須賀高等女學校内
	編集兼 大出 光威
	發行人 川上 吉治
	印刷所 宇都宮市旭町二丁目
	印刷人 中山 泰吉
	印刷所 株式會社三共社印刷所
發行所	須賀高等女學校文藝部

